

脱原発世界会議2012@YOKOHAMA セッション報告書

- 企画タイトル B-3「放射能から子どもを守る一社会を変える子育て世代の力」
- 日時 2012年1月15日(日) 10:00 - 11:45
- 場所 3Fホール(301+302)
- 企画参加人数 約600名
- 企画団体ピースボート
- 文責 高山瑤子(ピースボート)
- 登壇者
 - ・ 伊藤恵美子 子どもたちを放射能から守る全国ネットワーク呼びかけ人代表 <ファシリテータ>
 - ・ 大河原多津子 福島県田村市有機農家・反原発活動家
 - ・ 鈴木かずえ 国際環境NGOグリーンピース・ジャパン 核・エネルギー担当
 - ・ アントン・ヴドヴィチェンコ NGOラジミチ・チェルノブイリの子どもたち(ロシア)
 - ・ 安部美穂 横浜・子どもたちを放射能から守る会@横浜/エンジェルプロジェクト
 - ・ 玉崎洋子 滋賀・あすのわ
 - ・ 原田禎忠 仙台・放射能から命を守る宮城県南部の会

企画の目的

1. 福島原発事故が起きて放射能汚染が福島だけでなく全国レベルに広がっていることを確認し、全国各地で3月から現在までに子育て世代の行って来たことを振り返ること。
2. それまでは原発のことや行政への働きかけなどしたことなかった「普通の」お母さん、お父さんが成し遂げて来たことを評価し、子どもたちの未来のために今後も親たちが頑張っていく必要があること、そして頑張れば変えられるのであるという勇気づけを行うということ。

企画内容

これから子どもたちが生きていく未来を真剣になんとかしたいと願う人たちを対象としたこの企画は、朝から満員だった。伊藤さんからの会の趣旨と登壇者の紹介のあと、まずはグリーンピース鈴木さんより現状の日本における放射能汚染の概要を紹介するプレゼンテーションがあった。福島のみならず全国規模で大気、海洋、土壌が汚染されていること、食品やがれきを通じてさらにそれが広がっていること、政府は市民(とりわけ子どもたち)を守るための措置をとるところか、被曝を許容させる措置しか取って来ていないことなどが確認された。

安部さん、原田さん、玉崎さんはそれぞれが311以降に自分がとった動きや、地元で所属する会での活動を紹介。安部さんは311後数日間仮眠すらとらずに情報収集を続け、自分で情報を集めると同時にそれを読み解く力が求められていることを実感したと発言。活動が活発な横浜市では給食問題や汚泥の受け入れ問題を親たちが一体になり市とやりとりしてきたことを報告。原田さんは自身も地震により被災する中でまずは放射能より震災からの立ち直りをめざしたものの、すぐに放射能をまるでなかったかのような対応を続ける宮城県に対する活動をはじめたことを紹介。保守的な自治体に働きかける困難さを話した。玉崎さんは関西で人ごとのような反応が多い中でいち早くこれは大変なことだと声をあげ、311の数日後に仲間と不安や情報を共有できるような会を立ちあげた。直接の被害地域からは地理的な距離があるため、今後は一時疎開や避難の受け入れなどに力を入れて行こうとしている。それぞれ地域や規模、内容は違うものの、今回の原発事故をきっかけに活動をはじめた背景やその困難さ、達成して来たことなどを共有した。また、伊藤さんからは子どもたちを放射能から守る全国ネットワークの活動を通し、全国各地でさまざまな形で子育て世代が不安や葛藤を抱えつつも立ち上がり、その成果を見せて来ていることが共有された。

ロシアのアントンさんはチェルノブイリの経験を紹介。1986年当時まだ8歳だった自分をはじめとした子どもたちのために父親が立ち上げたNGOの活動やその経緯を話した。政府が情報を隠し、安全だといっていたために親たちが自分たちで子どもを守るしかなかったことなど、福島との共通点を強調した。ロシアでは今でも放射能の影響から子どもたちは無縁ではなく、自らも父親となったアントンさん自身も子どもたちの保養プロジェクトなどをそのNGOで続けており、その活動に息子も協力している。三世代にわたって子どもを守る活動が継続していることから、この問題は長期に渡り、世代を超えて続けなくてはならないことが会場の参加者と共有された。

大河原さんは、チェルノブイリ事故当初生まれたばかりの子どもを抱え、反原発運動をはじめた話をした。自分の暮らす福島に原発があること、放射能の脅威などから積極的に勉強会を開いたり東京のデモに参加したりしたが、有機農家として向き合う温暖化の苦しみや、反原発運動に対する違和感(専門的な知識を求められ、「原発がイヤだ」というだけで続けられない)から次第に遠のいてしまった。継続することができないでいた中で起きた今回の事故はだからこそ本当にショックで、しばらくは泣いてばかりいた。何よりもここまでの事故はきっと起きないに違いないとどこかで信じていた自分の甘さを悔しく思った、という発言には会場から温かい拍手が沸いた。だからこそ、今度こそ途中であきらめてはならないというメッセージが会場に力強く響いた。

時間が足りなくなったため登壇者全員から聞く予定としていた市民としてそれぞれが今後なすべきこと、活動を持続するために必要なこと、子どもたちを守るための脱原発のビジョンなどは一言ずつしかもらうことができなかったが、当初の目的であった全国各地の子育て世代の成し遂げて来たことや社会を変えて行く力があることを共有し、これからも継続して行くための勇気づけを行うという点はある程度達成できた。



(写真:水本俊也)